

山の中で見つけた不思議なトビケラ

—ヤマトビイロトビケラ—

自然保護センターボランティア 十川 巡一

多くのトビケラは、幼虫の時期には池とか、川の水の中で過ごし、まるでミノムシのように木の葉や水草、小さな石や砂粒で筒状などの巣をこしらえます。蛹が羽化するときには巣から出て水面で羽化するものが多いようですが、中にはホタルトビケラのように、幼虫がある程度成長した段階で水から這い出て蛹になる種もいます。ところが、今回見つけたのは、林の中に棲息する陸生のトビケラです。

2003年3月下旬に岡山市牟佐大久保の雑木林に息子と行き、息子がキセルガイの仲間など陸貝を探している時、落ち葉の下からトビケラの幼虫が作る筒のようなもの（筒巢）を見つけました（図1）。

長さは約10mm、直径1.5mm前後の筒で細かい砂で出来ていました。多くのトビケラは水中で生活をしているので、不思議に思い、持ち帰り調べてみると、筒には蓋があり、中には繭のような白い糸がありました。これを作った生きものはいませんでした。

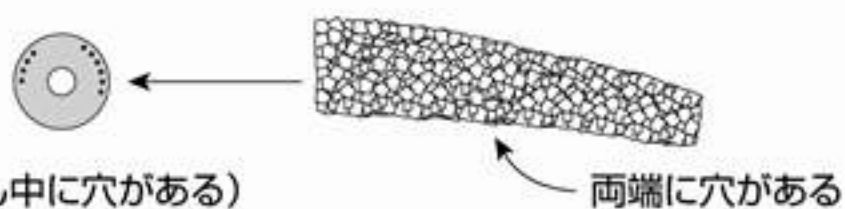


図1

3年後に違う場所で見つけたので、このトビケラについて調べた結果を報告します。

棲息しているところは、標高40~70mの範囲で何年も人の手が入っていない林の中で、高木にはアベマキ、コナラ、アラカシが多くヤマザクラ、サカキなどがあり、低木ではシロダモ、ヤブニッケイなどが生育しています。林の中にはあまり日が入らず、落ち葉が溜まっています。

筒巢は枯木の下や木のうろの中で見つけたこともありましたが、普通は山道近くの斜面の木の下側や大きな石の傍の土のある所などで見つかります。

最初は湿った所が好きなのかと思いましたが、乾いたところが好きなので、成長した幼虫はあまり湿った所を好まないようです。また、日がさして木漏れ日あたり温度が上がると、活発に動きまわります（図2）。

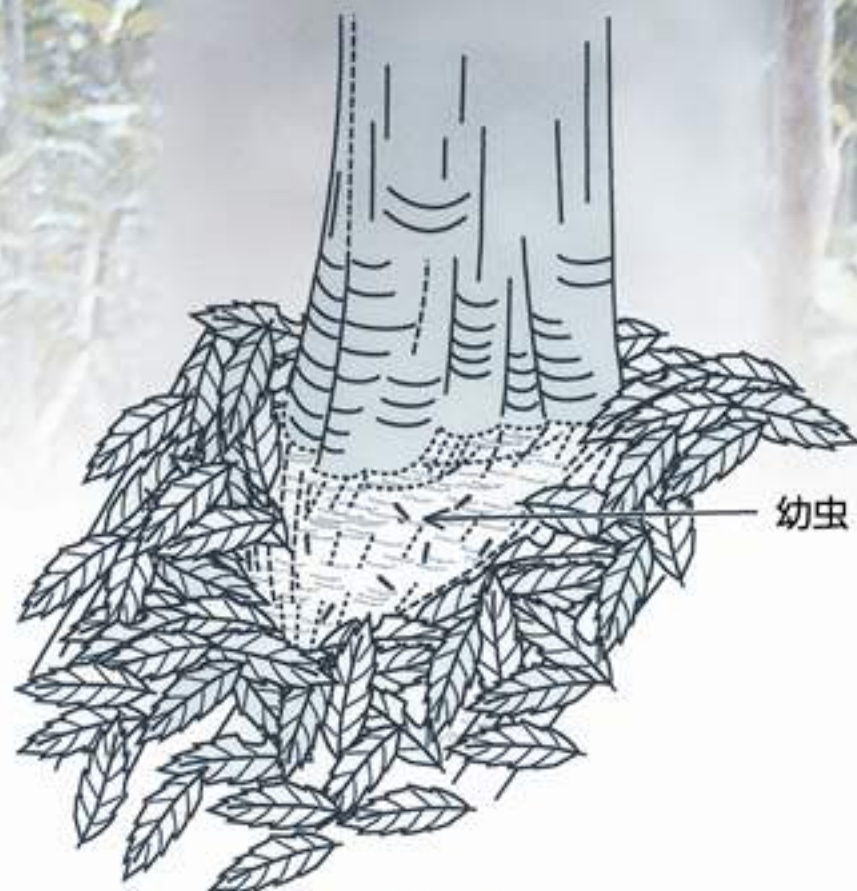


図2

1) トビケラを飼う

採取したら飼育しようと思っていたので、早々に持ち帰りました。

5月上旬、幼虫は順調に成長していました。2~3匹がくんずほぐれつ、ゴロゴロしているので、カツオブシを与えると、音こそ聞こえませんでした。また、「椿の花びらを湯通しして、さまして与えると、とてもよく食べた」と息子が嬉しそうに笑っていました。この後はアベマキやコナラの花の房を与えました。

1ヶ月後動かなくなり、結局羽化はしませんでした。管理が大変なので、それからは家で飼うのはやめました。

2) トビケラの名前を調べる

名前がわからなかったので、岡山県自然保護センターの研究員の森さんを通じてトビケラ専門の野崎さんに名前を調べていただきました。「陸生のトビケラでヤマトビイロトビケラです」との返事がありました。

多くのトビケラの幼虫は水生なので、とても珍しいトビケラなのだそうで、岡山県では息子が最初の発見者となりました。

日本で最初に記載した人は神奈川県在住の、トビ

ケラの専門家の野崎隆夫さんです。1999年に公表され、ヤマトビイロトビケラと名づけられました。

これまでに知られている生息場所は、島根・愛媛・福岡・熊本県で、いずれも標高200m以上の場所です。

牟佐大久保の発見場所は標高50m前後の低い場所で、生息地としては東限になります。

3) 野崎さん大久保の山に来られる

2003年の秋に岡山県で水生昆虫の研究者の集まりがあったので、野崎さんが「ぜひつれて行って欲しい、そんな低いところは初めてだ」と言って岡山に来られ、山の中を案内しました。手に入れた標本を喜んで持ち帰られました。

4) 成虫を探す

2004年11月23日、カゲロウを専門としている関西学園の吉鷹先生が「十川さんの山に行ってヤマトビイロトビケラを見せてほしい」と言われたので、吉鷹先生と学生4人を案内し、羽化して間もないヤマトビイロトビケラの飛び舞う姿を見ました。先生が「日本でも、いや、世界的にも珍しいトビケラです」と言われました。



陸生のヤマトビイロトビケラの幼虫が好む場所



手の平に乗せると、幼虫はすぐに動き始めた。



前日に雨が降った。
水を嫌うかのように葉の上に出ている幼虫



ヤマトビイロトビケラがよく飛んでいる林の中



羽化して間もないヤマトビイロトビケラの成虫(雄)

林の中では、ヤマトビイロトビケラが飛び始めていました。成虫もやはり日蔭よりも木漏れ日の当たるところに多く飛んでいました。

写真が出来たので息子に見せると、「なんじゃこれか、会社の周りでよく飛んでいる。今頃の時季に飛んでいるから何かと思っと思ったんじゃ！」凄い言葉が返ってきました。「えっ！まさか」と思い、一瞬体が固まってしまいました。